2022年度 学校教育研究活動助成学校による取組事例

※助成校から提出された成果報告書より、フォントやレイアウトを一部変更して掲載しております。

1 学校名	奈良県立香芝高等学校
2 研究活動名	『表現探究による次世代人材の持続可能な育成』

3 研究活動の目的

次世代の人材に必要となる資質・能力について、学習指導要領には、言語能力、情報 活用能力、問題発見・解決能力が挙げられ、また自分の考えや思いを伝えたり、よりよく物事を前に進めたりするためにコミュニケーション能力も必要不可欠である。また、 令和3年1月に文部科学省中央教育審議会が答申した「令和の日本型学校教育」の構築も目下の急務である。奈良県立香芝高等学校普通科表現探究コース（以下、「表現探究コース」）は、令和2年度に新設され、様々な活動を通して上記の資質・能力を伸長し、次世代の社会に必要とされる人材を育成することを目的としている。今年度で3学年が揃い、これから多くの生徒を迎えるにあたり、これまでの表現探究コースでの教育活動における共通の課題が3つある。1つ目は、プレゼンテーション能力や言語能力を育成するために、一般社会の知見ある外部講師の招聘が必要不可欠であることである。2つ目は、授業で学んだことを実際に社会で実践するためには、その実践を行う環境を整える工面が必要であることである。3つ目は、持続可能な教育を展開するために、これまでの教育活動を形として残したり、より持続可能な教育活動を実施したりする必要があることである。 そこで、表現探究コースの生徒 119 名を対象として、プレゼンテーションやラジオによる表現活動を通して、次世代の人材に必要となる、言語能力や情報活用能力、コミュニケーション能力を身に付けた創造性豊かな人材を育成する。また、これから入学する生徒にも同様の学びを展開できるように、出版物や動画データ等の形に残したり、より持続可能な新規事業を行ったりする。 本研究では、特に1年生のプレゼンテーション活動及び2年生のラジオによる表現活動を中心に研究活動を行う。プレゼンテーション活動では、プレゼンテーションの技法について、社会で通用しより実践的な学びにするため、教員の指導だけでなく、外部講師を招聘して習得を目指す。また、ラジオによる表現活動では、ラジオ特有の表現方法やコミュニケーション手法について、プレゼンテーション活動と同様に外部講師を招聘して学習する。また、授業で学習したことを実践する場として、実際FMラジオで放送する。さらに、その収録データをインターネット上で公開し今後の活動にも活用する。

4 研究の経過・成果

（1）プレゼンテーション活動

表現探究コースでは、学校設定科目として「表現探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を設定している。1年生で学ぶ「表現探究Ⅰ」における最初の授業では、自己紹介をスライドにまとめてプレゼンテーションする活動を行った。GIGAスクール構想により中学校で1人1台端末による教育が推進されていることもあり、端末操作に長けた生徒が増加し、教員の支援なく発表スライドを作成することはできていた。しかし、文字の大きさやレイアウトなどよりよく考えや思いを伝える表現技法や、身振り手振りやアイコンタクトを活用した表現手法の活用は乏しく感じた。プレゼンテーションの表現技法については、情報科「情報Ⅰ」にて「情報デザインとその実践」として指導項目に挙げられているが、情報科の教員の理解と協力がなければ教科横断的な学びは実現できないのが現状であり、他の教科の教員が指導するにはその内容について指導力不足が否めない点もある。

そこで、プレゼンテーションの基本や技法について知見を深めるため、日本プレゼンテーション教育協会の西原

様を講師として招聘し特別講義を行った。新型コロナウイルス感染症拡大のため、時期を変更しての開催になった。プレゼンテーションとは「伝える」ことではなく、「相手を動かす」ことであることを確認し、理解しやすいスライドの作成技法や、記憶に残る話し方について講義形式で教えていただいた。また、自分のオススメについて、プレゼンテーションの目的を明確にして、相手から出てきそうな疑問を想定し、実際にプレゼンテーションをするハンズオン形式の演習も行われた。 生徒たちだけなく、側で聞いている教員たちも熱心にメモをとり、ともにプレゼンテーションの基本や技法について学ぶ機会となった。

(2) ラジオによる表現活動

「目の前にいない人に伝える」をテーマに、地域のコミュニティ FM「FM ヤマト」のラジオパーソナリティの方を講師として招聘し、ラジオというメディアの特性や、どのように目の前にいない人々に対して、自分の考えや想いを伝えるのかを学習した。その後は、10 分程度のラジオ番組を企画し、役割や放送原稿を考えて、相互にラジオ番組を聴き合った。

授業後、学んだ内容を実践する場として、実際にコミュニティ FM に出演し、学校や地域の魅力を生徒自らの手で発信した。参加した生徒にとっては、学んだ成果を実践できる貴重な場となり、リスナーからも好評でした。また、学校としても生徒の目線で学校の魅力や取組を広報する良い機会となった。

授業で取り組んだ際の収録音源と実際のラジオ放送の音源は、YouTube にて公開している。それにより、当日ラジオを聴くことができなかった方にも聴いていただく機会を創出できるとともに、次年度以降に学習する生徒や指導する教員が教材として活用することができ、持続可能な教育の実現の一翼を担っている。

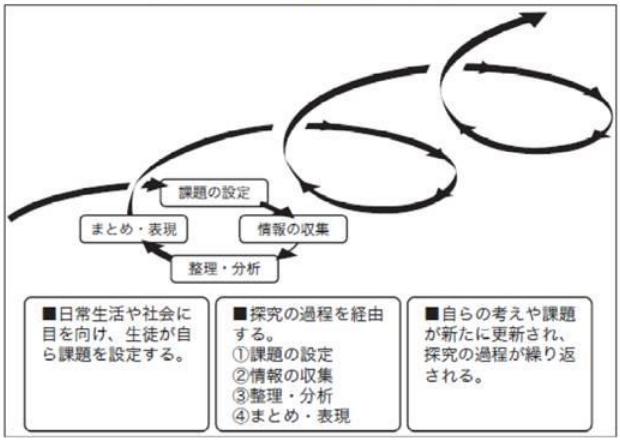
さらに、FM ヤマトにて香芝高校のレギュラー番組をもち、本研究の内容も含む表現探究コースの教育活動について放送している。アーカイブは YouTube にて公開し、活動の広報にもなっている。

5 今後の課題・展望

(1) プレゼンテーションを主体とした教育活動と探究的な学びの融合と深化

昨年度助成の書籍は、1期生の探究学習の指導や実際の教育活動において大いに役に立った。同様に、今回のプレゼンテーションの特別講義で得た知見についても、今後の学びに役立てられることを期待している。探究学習における生徒の学習の姿として、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を経て、螺旋階段状に続いていくイメージ(文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展

探究的な学習における生徒の学習の姿



開」（平成25年）から引用）があるが、プレゼンテーションを主体として教育活動がこのイメージを円滑に進める一助となると考える。プレゼンテーションとして表現するためには、プレゼンテーションする内容を整理、分析する必要があり、そのための情報の収集も必要である。探究的な学びが単なる調べ学習に終わるのではなく、学び得た知見をもとに、プレゼンテーションを主体とした教育活動と探究的な学びの双方が融合し深化する教育活動を展開したい。

（2）ラジオを教材とした教育活動のさらなる発展

FM ヤマトでのコース独自のレギュラー番組は、1・4・7・10 月の3ヶ月に1回行われる予定である。本研究と同様に、次年度も1学期に実施する特別授業と連動し、より実践的な学びが展開されることが期待される。

また、本研究を基板として、ラジオを教材とした教育活動がさらに充実できると考える。1つは、放送する内容に伴う情報リテラシーやメディアリテラシーの醸成である。本研究内においても、実際のラジオ放送で、間違った情報を伝えた際の訂正のお詫びが十分にできなかったことがあった。その場で指導し再度お詫びをしたが、事前にそのようなモラルやリテラシーについて学びを深めておけば、そういったこともなかったと実感した。もう1つは、発音や発声等の指導である。ラジオだけでなく、オンライン会議等でマイクを通して考えや思いを伝える機会がこれからも多くあると考える。その際に、よりよく伝わる発音技法や発声方法を知っておくと、より自分の考えや思いを伝えることができ、これまでにない教育の展開も期待できる。

（3）表現探究による次世代人材の持続可能な育成

2年連続で教育研究を行うことによって、コース設立3年目でありながらカリキュラムをほぼ確立でき、外部講師による講義や地元企業、自治体との連携活動についても、毎年同じ方、場所にお願いできるようになった。一方で、時代にあった教育を展開する必要もあり、質の高い能力育成や学力の向上につなげていきたい。

昨年度の研究報告書でも述べたように、「Society5.0」の社会では、自ら課題を発見し解決する力や、コミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力（クリティカル・シンキング）など、様々な情報を取捨選択できる力などが求められる。本研究での教育活動によって、これらの能力を身に付けて、本コースを卒業した生徒が、社会を動かす歯車になることを期待するとともに、この研究で行われた教育活動が、この年度で終わることなく継続的に行われることを望んでいる。

1 学校名	平群町立平群南小学校
2 研究活動名	『心豊かに生き生きと活動する南っ子の育成』

3 研究活動の目的

世界が直面している社会・経済・環境についての諸問題を解決するための目標がSDGsに設定されている。本年度は研修テーマにその視点を取り入れ、一人一人の児童に自分のよさや可能性を認識させるとともに、多様な人々と協働しながら持続可能な社会を目指す創り手を育てたいと考えている。本校は小さな町の小さな学校のため、内からの発信や外との連携が希薄になりがちである。SDGs という国際的な取組に参画する意識がそれらの課題の改善につながるよう研修を積み重ねていきたい。

◆生活科・総合的な学習の時間を中心に SDGs の視点を取り入れ、持続可能な 17 の開発目標について「知る→学ぶ→考える→深める→伝える」学習モデルを追究する。
◆各教科において身につけた知識・技能を活用したり、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力、人間性を発揮させたりすることができるよう研修を通して授業の改善を図り、主体的・対話的で深い学びの実現をめざす。
◆発達段階に応じて読書活動を推進し、言語能力の育成を図ったり、言語環境を整備したりする。
◆SDGs について学んだことをまとめたり、発信したりする手段として iPad を活用し、多様な人々と双方向の情報交換や意見交流ができるよう学習形態を工夫する。
◆言語能力、情報活用能力、問題発見解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、横断的系統的な視点から教育課程の編成を図る。

4 研究の経過・成果

1学期に教職員でSDGsについての研修を深め、2学期から授業研究に取り組んだ。1・2年生の生活科と5・6年の総合的な学習の時間の実践を報告する。

【1・2年生】
(1) 単元名　もっとなかよし !! へぐりのしぜん
～身近な自然や地域の人々との関わりを通して自然の大切さに気づく南っ子～
≪SDGs 11:住み続けられるまちづくりを≫
(2) 実際の活動
◆第一次では、単元の導入として、平群町と大阪市内の航空写真を提示し、町の様子について比較させる。そこから、平群町は、山、川、田畑などの緑に囲まれていることに気づかせる。次に、平群の自然について興味をもたせるために、特産物であるブドウに関する『平群の自然クイズ』をする。その後、他に知っている特産物を児童に挙げさせ、さらに詳しく知っていることをみんなで共有させる。同様に、ホタルに関する自然クイズも行い、今度は、虫や木について知っていることを共有させる。最後に、特産物や平群町にある施設などの中から、自分が興味をもったテーマを調べる。
◆第二次では、テーマごとのグループに分かれて、施設見学や地域の人に話を聞きに行かせる。今回、協力いただくのは、道の駅、農家(野菜、花、果実、米)、紀氏神社、中央公園である。目的意識をもって行けるように、どんなものがあるのか、どんなことをしているのかといった見学の観点を伝えておく。見学後、生活カードに学んだことを絵と文でまとめさせる。
◆第三次では、見学したことから、もっと知りたいことをグループで考えさせる。質問をまとめて、再度、同じ施設

に見学へ行かせる。見学後、生活カードにさらに学んだことをまとめさせる。
◆第四次では、伝えたいことを発表するためのスライドや原稿をグループで作らせる。交流会では、『発表→お尋ね→感想』の流れで進め、自分が調べたテーマ以外の平群の自然についても学ぶことができるようにする。まとめの活動として、もっと知ることができた平群の自然についてのポスターやパンフレット作りをし、平群の自然をもっとたくさんの人に知ってもらうために、家の人に見てもらい、道の駅などにも置いてもらえるようにする。
（3）成果
　自分たちにとって身近な自然環境を見つめ直し、その恵みやありがたさを実感することができた。調べたいという意欲を出発点に、自分たちの足で地域をめぐり地元の人たちと交流できたこと、異学年が適切なコミュニケーションを図りながら協働学習を進めることができたこと、自分の思いを発表することにより表現力を高めることができたことが成果として挙げられる。特に地域との交流という点では、収穫物をいただいたり、インターネットにはない情報を得たりするなど、顔が見える直接のふれあいが一人一人の達成感の下支えになっていたといえる。

【5･6年】
（1）単元名　活気ある私たちのふるさと平群町
≪SDGs１１番：住み続けられるまちづくりを≫
（2）実際の活動
◆第一次では、単元の導入として SDGs１７ の目標について個々で調べ、分かったことをスライドにまとめ学級で発表させる。まずは興味を持たせるために、難しい単語を極力使わずに説明するように指導する。そこから、SDGsとはどういった内容なのかを理解するとともに、それぞれの目標が抱えている問題について学級内で共通理解を行う。
◆第二次では、SDGs について調べたことを活かして、自分たちの身近なところに SDGs に関わる取り組みなどがないか探す。まずは南小学校内で探し、そこから平群町全体でも考えさせる。グループで話し合いながら探すことで、子どもたちの視野が広がるようにする。SDGs１１ 番の目標は「住み続けられる町づくりを」である。平群町を SDGs の視点から見ると、町づくりに関わってどんなことが行われていたのかについて全体で話し合う。ゲストティーチャーである役場の方からは、行政ではどのようにして町づくりをしているのかを教えてもらう。
◆第三次では，第二次で役場の方から教えてもらったことを活かし、自分の意見を構成させる。「誰もが住み続けたい平群町」をテーマに考えを深めさせていく。考えた意見は、ワークシートにまとめていく。
友達の意見と比較しながら交流を深め、グループで１つの意見を構成させていく。その際は、「誰もが住みやすい」という視点をふまえるよう助言する。できあがった案は、全体で交流する。
◆第四次では，全体交流での質疑もふまえて，案を見直す時間をとる。さらによい意見になるよう，グループで考

えさせる。出来上がった案は，役場の方に伝える。　（3）成果

事前アンケートの「平群町が好きですか」という質問では、「はい」と答えた児童が多くを占めた一方、「この先、平群町に住んでいたいと思いますか」では若干「いいえ」の方が多い結果となった。その理由として「不便だから・店が少ないから」などが挙げられた。しかしながら、自分たちの生活を支えている町役場の人たちの政策を聞く機会をもつことにより、自分たちの町をもう一度見つめ直し、自分たちなりの改善点・解決策を探る議論に落とし込むことができた。実社会や実生活を通して持続可能な町づくりをしていくにはどうすればよいか、自然が多く住みやすいという長所を生かすにはどうすればよいか、自分ごととして考える子どもが多かった。

タブレットを使って意見を確認し合い、話し合いを活発に進めている６年生の子どもたち

5 今後の課題・展望

今年度の研修を通して、次のような課題が見うけられた。

①主体的な態度を育てる

総合的な学習の時間では、実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理分析して、まとめ・表現できるようにする力を求めている。総合的な学習の時間につながる生活科においても、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現するができるようにする力を求めている。しかしながら、その表現力を発揮させるまでの過程において、時間的な制約や学習環境の整備不足が原因で、ややもすると指導者が主導するようなスタイルに陥ることがある。今回の実践では、低学年が自然、中学年が社会福祉、高学年が町づくりといった学習テーマを設定し、実社会や実生活に目を向けることから始めることができたが、改めて学習テーマの重要性を実感している。今後の課題として、子どもたちの主体性に重点を置いた学習テーマになっているか、学年や他教科との関連性に基づき横断的・継続的な取り組みになっているかという観点で、生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムを見直していかなければならない。

②学習環境を整備する

生活科・総合的な学習の時間においては、子どもたちが活動をスムーズに進めるために学習環境を整える必要がある。情報機器ツールや学校図書館の蔵書など、学習活動に応じて子どもたちが効果的に選択できるように日常的に準備しておくことが大切である。ハード面だけでなく、地域ボランティアやゲストティチャーの登録や活用といった人的財産の確保についても検討していかなければならない。しかしながら、そういった学習環境の整備を進めて行くにあたっては予算的な課題も発生する。その意味では、今年度受領させていただいた学校教育研究活動助成金は大いに役立ったと感じている。例年以上に多くの図書を購入することができたので、調べ学習に際して子どもたちは学習理解を大いに深めるとともに、日頃の図書活動を活性化させることにつながっ

た。加えて、現在一人に一台タブレット端末が支給されているが、周辺機器をさらに整備することができた。自分の書いた文字や取り入れた画像が教室の大型モニターに映し出されることで、子どもたちの意欲や関心が引き出され、クラスの学びを共有する一助となった。今後もさまざまな条件を考慮しながら、主体的・対話的な深い学びを推進するための適切な学習環境の整備を実現させていきたい。